國學院大學学術情報リポジトリ

『日本考』における和歌と歌謡の漢訳

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2024-06-19 キーワード (Ja): 『日本考』　, 和歌　, 歌謡　, 漢訳 キーワード (En): 作成者: 胡, 暁暉, Hu, Xiaohui メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000494

『日本考』における和歌と歌謡の漢訳

A Study on the Translation of Wakas and Ballads in *Nihon Kō*

胡　暁　暉

キーワード：『日本考』　和歌　歌謡　漢訳
Key Words: *Nihon Kō*　Waka　Ballad　Japanese-Chinese translation

要旨

『日本考』は和歌及び歌謡計51首が収録されている。同書における和歌は「タイトル」「歌辞」「呼音」「読法」「釈音」「切意」という六つの部分に分けられ、歌謡は「タイトル」「歌辞」「釈音」「切意」という四つの部分に分けられている。本稿はその中の漢訳である「切意」を中心に考察した。

『日本考』の編者は、中国人に和歌及び歌謡という新しい文学様式を紹介する際、中国正統的な文学様式である漢詩を利用するが、多様な形が併存している。本稿において、まず編者がなぜ異なる詩体を採用したのか、また各詩体の特徴はどうなのか、という詩体問題を明らかにした。次に、漢訳の言葉の扱い方を明らかにする上で、ミクロの視角から、和歌の翻訳特色を考察した。最後に、和歌と歌謡の漢訳を比較し、その雅俗差異を通して明人の審美意識を探求した。

Abstract

Nihon Kō includes 51 Wakas and Ballads. The Wakas in the book are divided into six parts and the Ballads are divided into four parts. This paper focused on the translation of Wakas and Ballads.

When the editors of the *Nihon Kō* introduced the new literary genre of Waka to the Chinese, they adopted the traditional Chinese literary genre -- Chinese poetry, and used many forms. The first question to be clear in this paper is why editors adopted various poetic styles and what are the characteristics of each poetic style. Secondly, on the basis of clarifying how to deal with words in Chinese translation, this paper examined the translation features of Wakas from a micro perspective. Finally, this paper compared the Chinese translation of Wakas and Ballads, and explored the aesthetic consciousness of the people of the Ming Dynasty through the differences of elegance and vulgarity.

はじめに

『日本考』は日本の歴史、地理、時政、風俗、文字などについて紹介し、その中に39首の和歌と12首の歌謡が収録されている。明代日本研究書の集大成として従来中日学者の注目を集めているが、同書における和歌・歌謡の研究は少なく、特に翻訳問題があまり取り上げられなかった。

同書に和歌は「歌謡」と呼ばれ、歌謡は「山歌」と呼ばれている。中国で「歌謡」という詞が文献に初出するのは『詩経』における魏風「園有桃」の「心之憂矣、我歌且謡」である。毛伝は「曲合楽曰歌、徒歌曰謡」と説明している。つまり、音楽がない歌は謡である。また、「山歌」というのは、白居易「琵琶行」の「春江花朝秋月夜、往往取㆑酒還独傾。豈無㆓山歌与村笛㆒、嘔啞嘲哳難為㆑聴」が有名であり、山村の歌を指している。編者は和歌と歌謡に対する位置づけが異なるため、翻訳した時に使われた文学形式と言葉にも差がある。

『日本考』に収録される和歌は図１のように「タイトル」「歌辞」「呼音」「読法」「釈音」「切意」という六つの部分に分けられ、仮名の発音に近い漢字を利用し、一字一音の形式で紹介された。これは中国文学史上未曾有の翻訳方法であり、独創性がある。この翻訳方法はすでに拙稿「『日本考』所収和歌考釈ーー私撰集を中心に」（『東アジア文化研究』第７号、2022-2）において紹介しており、詳細はそちらを参照されたい。歌謡は図２のように「タイトル」「読法」「釈音」「切意」という四つの部分に分けられ、和歌よりは簡潔である。

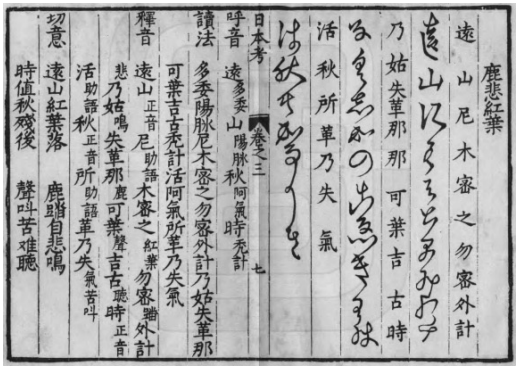

図１　万暦刊本影印『日本考』　和歌[1]

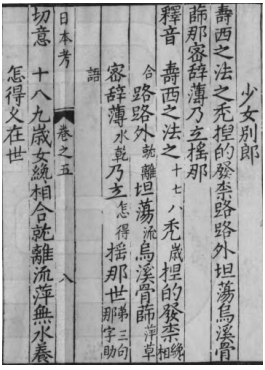

図２　『日本考』　歌謡

(1)　本稿に利用される『日本考』の影印本は中国国家図書館による。以下同。

本稿はその中の漢訳である「切意」をめぐり、漢訳の表現様式・問題点・雅俗差異などについて考察する。

一.『日本考』における和歌の漢訳

『日本考』の編者は、中国人に和歌という新しい文学様式を紹介する際、中国正統的な文学様式である漢詩を利用するが、四言詩、五言詩、七言詩及び雑言詩など多様な形が併存している。

四言詩の場合は、「秋田暁露」「年内立春」「帰遅嘆世」「択善相交」「新歳挙筆」「春風過嶺」「世笑梅獣」「京郷辨智」「日月同天」は四言四句の形をとっている。五言詩は表２のように計12首がある。七言詩は「岩衣山帯」「托月譬病」「皓月逢雲」「月下雁帰」であり、九言詩は「雲山苔石」と「指月候人」である。明の胡応麟は『詩薮』にこれらの詩体の特徴を論じた。

> 四言簡質、句短而調未レ舒、七言浮靡、文繁而声易レ雑。折二繁簡之衷一、居二文質之要一、蓋莫レ尚レ於二五言一。故三代而下、両漢以還、文人芸士、平生精力、咸萃二斯道一。(2)

四言詩は簡素で、七言詩は繁雑で、五言詩は折衷でもっとも良い詩体のため、文人は五言詩に力を入れる。『日本考』における漢訳は前述のように四言詩は10首で、五言詩は12首で、七言詩は４首である。その中に、勅撰和歌集に由来した和歌の漢訳詩体は整っていることに注意を払いたい。

表１によれば、『古今集』『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』などに由来した歌の漢訳は四言詩と五言詩に集中する。文人作の雅さは四言詩と五言詩で人々に伝わる意識を込められたか。同書の編纂者は日本語があまり詳しくなかったが、勅撰集に由来した歌を文人が評価された四言詩と五言詩に訳されたのは、興味深いことである。

また、九言詩はそんなに多くないが、その歴史が長い。

---

(2) 明・胡応麟著.『詩薮』、上海古籍出版社、1979、P22。

表１　勅撰和歌集に由来した和歌の漢訳詩体

番号	和歌	原典	漢訳詩体
1	秋田暁露	『後撰和歌集』	四言詩
2	鹿悲紅葉	『古今和歌集』	五言詩
3	冬花春発	『古今和歌集』	五言詩
4	年内立春	『古今和歌集』	四言詩
5	難中春怨	『古今和歌集』	四六駢儷文 (3)
6	憶摘桜桃	『古今和歌集』	五言詩
7	摘花遇雨	『拾遺和歌集』	五言詩
8	春野採花	『古今和歌集』	五言詩
9	倩人摘梅	『古今和歌集』	七七三三
10	心命相連	『古今和歌集』	五言詩
11	夜月感懐	『後拾遺和歌集』	五言詩

自二炎漢中葉一、厥途漸異。退傅有二在鄒之作一、降将著二河梁之篇一、四言五言区以別矣。又少則三字、多則九言、各体互興、分レ鑣並駆。(4)

蕭統の「文選序」に述べたように、南北朝時代には九言詩がすでに発展していた。特に有名なのは元・明本の「九字梅花詠」であり、明代の楊慎はこれをまねて「詠梅九言」を詠んだ。

九字梅花詠
元・明本

昨夜西風吹折二千林梢一、渡口小艇滚入二沙灘坳一。
野橋古梅独臥二寒屋角一、疎影横斜暗上二書窓一敲。
半枯半活幾個槀蓓蕾、欲開未開数点含香苞。
縦使画工奇妙也縮レ手、我愛二清香一故把新詩嘲。(5)

(3) 四六駢儷文は四字と六字からなる対句を用い、「四六四六」「六四六四」「四四六六」などの形があり、「難中春怨」は「四四六六」という形を利用した。
(4) 梁・蕭統『文選』序、上海古籍出版社、1986、P2。
(5) 清・顧嗣立編.『元詩選』、中華書局、1987、P1380。

詠梅九言　元僧高峰有此作
明・楊慎

昨夜小春十月微陽回、緑萼梅蕊早傍二南枝一開。
折贈未レ寄二陸凱隴頭一去、相思忽到二盧仝窓下一来。
歌残二水調一沉珠明月浦、舞破二山香一碎玉凌風台。
錯恨二高楼三弄叫雲笛一、無奈二二十四番花信催一。(6)

故に、明代にも九言詩の創作は続いた。『日本考』の編者は和歌の内容に基づいて各詩体を柔軟に利用している。

次に、漢訳の平仄と押韻を明らかにしたい。まずは五言詩である。

遠山紅葉落　鹿踏自悲鳴　時値秋残後　声叫苦難聴

一見して明らかなように、この歌の漢訳は五言絶句の形式を取っているが、漢詩としてもそれ自身立派なものである。(7)

劉雨珍氏は「鹿悲紅葉」の漢訳は五言絶句と指摘したが、本稿はまず「鹿悲紅葉」と「冬花春発」を例として検討する。「鹿悲紅葉」は猿丸大夫の有名な「奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の声きく時ぞ秋は悲しき」によるものである。

鹿悲紅葉

遠山紅葉落　鹿踏自悲鳴
㊀平平仄仄　仄仄仄平平
時値秋残後　声叫苦難聴
㊁仄平平仄　平仄仄平平

まずその韻を説明する。韻脚は「鳴」と「聴」であり、「鳴」は下平八庚韻を押し、「聴」は下平九青韻を押す。庚韻と青韻は隣韻であり、律詩なら、「隣韻通押」とい

(6) 清・銭謙益編、許逸民・林淑敏点校.『列朝詩集』丙集第十五、中華書局、2007、P3800。
(7) 劉雨珍.「中国における和歌」、『日中文化交流史叢書 6　文学巻』収録、大修館書店、1995、P114。

う状況がある。しかし、「隣韻通押」は普通に第一句と第二句に使用されるため、第二句と第四句に使用されると、出韻になってしまい、つまり韻を踏み外れることである。次にその平仄の状況を検討する。近体詩なら、五言詩は普通に「一三不論」で、つまり一番目と三番目の字の平仄は自由である。第一句「㊀平平仄仄」は「平平平仄仄」のはずが、このルールに基づき、第一字は平と仄をどちら使われてもかまわない。第三句も同じ。しかし、問題なのは第四句である。第三句の「㊁仄平平仄」によって、第四句は「平平仄仄平」のはずが、第二字と第四字の平仄は逆となっている。故に、本漢訳は韻と平仄どちらも絶句の格律に合致するとは言い難い。

「冬花春発」は『古今集』仮名序における「難波津に咲くや木の花冬こもり今は春べと咲くや木の花」に対する翻訳したものである。

冬花春発

何園開這花　　冬到已蔵華
平平平仄平　　平仄仄平平
遇春開遍苑　　原是這枝花
仄平平仄仄　　平仄仄平平

まず韻脚は「華」と「花」であり、二字は下平六麻韻を押す。しかし、第三句の平仄は問題がある。近体詩は「粘」というルールがあり、絶句の場合、第三句の二番目の字は第二句の二番目の字の平仄と一致することを指す。一致しないと、「失粘」となってしまう。本詩は「失粘」という状況である。

さらに、上述の詩と同様に、『日本考』における訳文である五言詩は表２のように平仄や押韻が両方ともに合うのは一つもない。故に、これらの五言詩は絶句ではなく、古体詩である。

また、訳文の七言詩と九言詩は一見して聯の形であるが、必ず対句になれない。例えば、「岩衣山帯」「雲山苔石」は並置された二句がきちんと語形や意味上対応できるが、「托月譬病」「指月候人」などはそうではない。そして、たとえ「岩衣山帯」「雲山苔石」でも平仄は対句に合わない。

表２　『日本考』における漢訳である五言詩

番号	作品	内容				平仄[8]	押韻
1	鹿悲紅葉	遠山紅葉落 ㊀平平仄仄	鹿踏自悲鳴 仄仄仄平平	時値秋残後 ㊁仄平平仄	声叫苦難聴 平仄仄平平	×	×
2	冬花春発	何園開這花 平平平仄平	冬到已蔵華 平仄仄平平	遇春開遍苑 ㊀平平仄仄	原是這枝花 ㊁仄仄平平	×	○
3	憶摘桜桃	高山雲影罩 平平平仄仄	渺見桜桃花 仄仄平平平	心欲伸手摘 ㊁仄平仄仄	紅日又西斜 平仄仄平平	×	○
4	春野採花	春野為君出 ㊁仄㊀平仄	纔把花枝折 平仄㊁平仄	採花遇春雨 仄平仄平仄	我手衣袖湿 仄仄平仄仄	×	×
5	心命相連	性命心相連 仄仄平平平	物物皆容易 ㊀仄平平仄	何時若分開 平平仄平平	不苦苦自来 仄仄㊀仄平	×	×
6	夜月感懐	君思知明月 ㊁平平平仄	世事若渾河 ㊀仄仄平平	神風常拂動 平平平仄仄	焉得漾清波 ㊁仄仄平平	×	○
7	摘花遇雨	摘桜逢暴雨 ㊀平平仄仄	衣衫左右湿 ㊁平仄仄仄	花下堪遮躱 平仄平平仄	淋漓睡不得 平平仄仄仄	×	×
8	春雲引志	春夜月様馬 平仄仄仄仄	我想騎上雲 仄仄平仄平	此時不相見 仄平仄平仄	変化自飛騰 仄仄仄平平	×	×
9	暴雨譬瘡	病如村雨暴 仄平平仄仄	瘡如雨傘張 平平仄仄平	天晴棄了傘 平平仄仄仄	瘡脱病無妨 ㊁仄仄平平	×	○
10	雲迷夏月	夏夜雲遮月 仄仄平平仄	要明不得明 仄平仄仄平	回去不相見 平仄仄平仄	二十晩黄昏 仄仄仄平平	×	×
11	浪裡行舟	快揺船坊舟 仄平平平平	速行志摩州 仄平仄平平	便風没工夫 仄平仄平平	何為浦浪憂 平仄仄仄平	×	○
12	涙筆写情	思你動離愁 ㊁仄仄平平	挙筆涙先流 仄仄仄平平	想情和涙写 ㊀平㊀仄仄	墨滲湿難收 仄仄仄平平	×	○

「岩衣山帯」：苔蔽岩穿衣没領　霧横山繋帯無腰
平仄平平平仄仄　仄平平仄仄平平

「雲山苔石」：白雲横罩山腰如繋帯　緑苔深結岩頭似着衣
仄平平仄平平平仄仄　仄平平仄平平仄仄平

「托月譬病」：仮病可比初三月　渺見出先[9]蔫地入
仄仄仄仄平平仄　仄仄仄平仄仄仄

「指月候人」：夏天二十三夜等候君　人前仮説這里候月出

(8)　正しいのは○、正しくないのは×。押韻同。
(9)　『日本風土記』で「先」は「光」に作る。

仄平仄仄平仄仄仄平　平平仄仄仄仄仄仄仄

そのほか、四言詩は古体詩に属し、近体詩のように訳文の平仄と押韻を分析する必要がない。ゆえに、『日本考』における和歌の漢訳である四言詩、五言詩、七言詩及び九言詩は古体詩であり、楽府詩の性格を有する。また、漢魏楽府は詩を命名するとき、二つの特徴がある。一つは詩の内容によって名付けることであり、もう一つは音楽によって名付けることである。(10) 前者は題名から詩の内容がわかり、これは『日本考』における和歌の命名方法と一致している。

最後に、「雑言詩」を考察する。雑言詩は計12首であり、訳文は3句から6句までである。

表3　『日本考』における漢訳である雑言詩

番号	和歌	内容
1	難中春怨	月非昔月　春非昔春　我身不比故旧　故旧不是我身
2	倩人摘梅	梅花顔色誰人見　香氣引君至此看　知音者　挙手攀
3	松影罩山	夏夕住吉松有影見　射對過阿波州山塢
4	松風撹睡	夜坐倦　猛思念　我心不快活　睡倒時　風吹松動　驚醒難安
5	蜒蝣避牛	帯殻蜒蝣雖有角　牛来踏着損其身　蔵在天井　胆大防驚
6	樵子偸桃	負薪春樵　路傍偶見桜桃　摘子又摘　担重難挑
7	武蔵無山	武蔵州　無山島　月出出野草　月入入野草
8	相期不候	我相約鶏鳴　須索等　縁何失信　你就睡　見不再思
9	夜約悞期	一更専等　夜過已半　四更不来五更睡　到夢中你来相見
10	世別清渾	世中好歹　人難分別　如水混清澄　惟有神知識
11	玉霜問婦	侵晨夫執玉霜　問婦不答悒惶　送帰涙下　草尼地結成霜
12	漁舟速釣	收拾漁舟浦内行　老人招手把篙撑　漁翁忙勒袖　永是釣魚人

その中に、「難中春怨」は四六駢儷文であり、そして「春」と「身」は真韻である。「武蔵無山」は三三五五の形式であり、「島」と「草」は皓韻である。また、それらの訳文の中に隣韵を利用することもある。例えば、「倩人摘梅」における寒韻の「看」と刪韻の「攀」であり、「樵子偸桃」における蕭韻の「樵」「挑」と豪韻の「桃」

(10) 林心治、「『文苑英華』歌行体性弁――唐歌行詩体論之二」、『渝州大学学報』、1997 (02)、PP54-57。

である。ほかの訳文の形式は自由であり、和歌の意味を伝えている。

本節は『日本考』における和歌の漢訳を考察した。編者は詩体にこだわらず、詩の内容に基づいて漢訳形式を選んでいた。漢訳の多くは古体詩であり、楽府の性格を有し、清新な作品である。

二.『日本考』における歌謡の漢訳

『日本考』には12首の歌謡が収録され、「山歌」と称されている。「山歌」はもともと山村の歌を指しているが、浜田敦は「日本風土記山歌註解」で「山歌」の意味を次のように指摘している。

> （山歌が）恐らく「鄙歌」の意であろうとされている。内容からみて日本風土記のものも、俗謡、殊に恐らく中国江浙地方の沿岸をあらしまわったと云われる、倭寇八幡船の榜人などが口ずさんだ舟唄の類らしいことには間違いなさそうである。(11)

また、大友信一は『日本考』における12首も「江蘇・浙江辺を荒らし廻った八幡船の乗組員達（勿論、日本人）が残して行き、恐らくは呉人に口ずさまれた日本の舟唄であるから、山歌といってよいことになる」(12) と説明している。

『日本考』における歌謡は図２のように、歌辞を音注漢字で表記されている。ゆえに、従来、これらの歌謡の復元を目指した研究は多く、大きな成果を収めたが(13)、歌謡の漢訳に関する研究は少ない。歌謡の原典は表４のようであり、原典未知のはまだ６首が残っているため、今後の課題として続いて探求していきたい。本節はその漢訳を試論する。

---

(11) 浜田敦.「日本風土記山歌註解」、『京都大学文学部研究紀要』（4）、1956-11、PP787-810。
(12) 大友信一.「日本風土記“山歌”考」、『文芸研究』(40)、1962-8、PP36-49。
(13) 例を挙げると、浜田敦「日本風土記山歌註解」、大友信一「日本風土記“山歌”考」以外に、西村真二「こぼれ松葉――『日本風土記』に於ける山歌の再検討――」（『安藤教授還暦祝賀記念論文集』、1940）があり、志田延義『続日本歌謡集成』巻二「中世編・第二十一　日本風土記の山歌」（東京堂、1961）に十二首の小歌の釈音・切意をあげている。また、吾郷寅之進「中世難解歌謡私注（2）」（『甲南大学文学会論集』(12)、1960-9）、福島邦道「日本風土記山歌三首」（『未定稿』八、1961-3）及び「明代中国文献に見える日本の詩歌」（『言語と文芸』三九、1965-3）など素敵な研究成果がある。

表４　『日本考』における歌謡の原典[14]

番号	歌謡	出典
1	青春嘆世	『延享五年小歌しやうか集』
2	美女憶郎	『うすゆき物語』
3	雑唱小曲	『室町時代小歌集』
4	又	『室町時代小歌集』
5	又	狂言「相合袴」
6	夜憶故交	「巷謡篇」

歌謡は「山歌」に位置付けられたため、その漢訳はわかりやすい。

表５　『日本考』における歌謡の漢訳

番号	歌謡	漢訳
1	日春清水寺	此日春京清水寺　水流滴響似琴声
2	夫帰妻接	心肝丈夫　大心肝丈夫　逓弓来　放在我肩上　箭袋頂在我頭上
3	月夜私情	十五夜月明　一更時上雲　五更復光華　好送有情人
4	少女別郎	十八九歳女　纔相合就離　流萍無水養　怎得久在世
5	青春嘆世	十七八時難算二次　好比枯木残花　霎時又是一世
6	美女憶郎	月被雲遮　花遭風擺　想着来不来　不想来偏来
7	雑唱小曲	月華花茂　趁好而来　冲風冒雨　心誠而来
8	又	我想你時如草根　鏟去 又生又鏟　又鏟又生
9	又	料然波與浪　打不過松山嶺　你與我千年同到老
10	夜憶故交	去年今夜與和多多同睡　今年今夜我自睡　因何忘記和多同睡　自呼我身大心肝
11	祝延聖寿	君主千年万歳　千年万歳　恭喜大宴　歌唱有期　太平時世
12	女嘆配遅	回話不明白　教人没頭緒　世似河船棕纜　拴乾閣起何時離

漢訳の形式について、12首の訳文の中に、四言四句、五言四句と七言二句なのは四つがある。「日春清水寺」「月夜私情」「少女別郎」「雑唱小曲」（其一）の漢訳は楽府詩の性格が強い。詩の形式とリズムを利用するが、立派な詩を作るより、意味の伝達のほうが重要である。それ以外の訳文は一句の字数をこだわらず、口

(14) 本表は吾郷寅之進「中世難解歌謡私注（2）」、浜田敦「日本風土記山歌註解」、渡辺三男『新修訳注日本考』（新典社、1985）、大友信一「日本風土記“山歌”考」などによって作る。

語が多く使われる。

訳文における言葉の中に、「心肝」が最も筆者の注意を引き、「夫帰妻接」及び「夜憶故交」ともに詠まれる。両歌に「いとし」を「心肝」と訳し、「いとし」はかわいい、愛しいという意味である。「心肝」は中国語で心と肝であり、普通に心のこもった感情を指している。『文選』巻二十三王粲「七哀詩」其一の「悟二彼下泉人一、喟然傷二心肝一」が見える。また、口語として、特にかわいがる人などに喩える。明の小説と戯曲にはよく愛する人を「心肝」あるいは「心肝肉」と称する。凌濛初『初刻拍案驚奇』巻八「烏将軍一飯必酬　陳大郎三人重会」に次のような内容がある。

> 問起縁由、才知病体已漸痊可、只是外甥児女毫不知些蹤跡、那曾氏便是“心肝肉的”放声大哭起来。（理由を聞き、病体がだんだん全快したことを知ったが、姪の姿少しも見えず、その曾氏は「心肝肉的」と大声で泣き出した。）(15)

曾氏は姪を「心肝肉」と呼ぶ。また、特に男女の間は互いに「心肝」「心肝肉」と称する状況が多い。馮夢竜の『喩世明言』巻三十八「任孝子烈性為レ神」に次のような内容がある。

> 周得答道：好姉姉、心肝肉、你既有心於我、我決不負於你。（周得は、好いお姉さん、心肝肉、あなたは私が好きなので、私は決してあなたを忘れないと答えた。）…這婦人…道：我心肝、我不枉了有心愛你。（この婦人は私の心肝、私はあなたを愛することを無駄にしないと言った。）(16)

孟称舜の『嬌紅記』第十九出「帰図」に自分の好きな人を美人や心肝と呼ぶことがある。

---

(15) 明・凌濛初編、陳偉点校.『初刻拍案驚奇』、陝西人民出版社、1993、P78。中国語訳は筆者が翻訳した。以下同。

(16) 明・馮夢竜編、趙俊玠・文飛校注.『喩世明言』、陝西人民出版社、1985、P570。

咦、我的美人、我的心肝。[17]（おや、私の美人、私の心肝。）

「心肝」以外に、もう一つ検討したい口語は「女嘆配遅」の「没頭緒」である。

女嘆配遅

一多脈和枯里和白枯里外卸迭革活浮尼揺那子那烏之革結的一子埋畳

釋音　一多脈和$_{同話}$枯里和白$_{不明}$枯里外卸迭$_{没頭序}$革活$_{河}$浮尼$_{缸}$子那$_{棕纔}$烏之$_{拴}$

革結的$_{閣起}$一子埋畳$_{何時離}$

「没頭緒」は「枯里外卸迭」の中国語訳である。「枯里外卸迭」について、渡辺三男[18]と大友信一[19]は「呉れはせで」と解し、くれないの意を指している。それに対し、「没頭緒」は中国語で手がかりがない、筋道がないという意味である。明・羅懋登の『三宝太監西洋記』第五十五回「金碧峰勧化道長　金碧峰遍査天宮」にこの言葉がある。

這都是個没頭緒的事、教人怎麽好処他。[20]（これは筋道がない事で、彼をどうするのか。）

明は俗文学が発達し、当時の口語を文学作品に反映する。歌謡は山歌に等しくされるため、口語を使われるのはおかしくない。総じて言えば、「鄙歌」の性格に対応するのは、歌謡の漢訳はある形式にこだわらず、口語を利用し、庶民的、俗的な傾向がある。

三．漢訳の問題点

当時中国人の編纂者は日本語文法に詳しくないため、和歌を翻訳したとき、問題は少なくない。本節は漢字の誤読、仮名の誤読及び加訳、訳漏れという四つの

(17) 明・孟称舜著、卓連営注.『中国古代戯曲経典叢書・嬌紅記』、華夏出版社、2000、P89。
(18) 渡辺三男.『新修訳注日本考』、新典社、1985、P318。
(19) 大友信一.「日本風土記“山歌”考」、『文芸研究』(40)、1962-8、PP36-49。
(20) 明・羅懋登著.『三宝太監西洋記』、黒龍江美術出版社、2016、P399。

面から分析する。

まずは漢字の誤読問題であり、「春雲引志」を例として検討する。

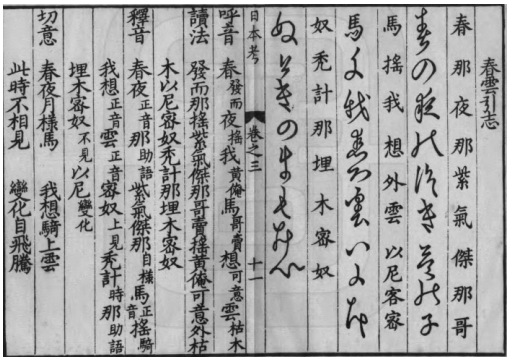
春雲引志
春 那 夜 那 紫 氣 傑 那 哥
馬 摇 我 想 外 雲 以 尼 客 寄
奴 禿 計 那 埋 木 寄 奴
日本考 卷之三 十一
呼音 春發而夜摇我黄倫馬哥賣想可意雲枯木
讀法 發而那摇紫氣傑那哥賣摇黄倫可意外枯
木以尼寄奴禿計那埋木寄奴
釋音 春夜正音那助語紫氣傑那自樣馬正音摇騎
我想正音雲正音寄奴上見禿計時那助語
埋木寄奴不見以尼變化
切意 春夜月樣馬 我想騎上雲
此時不相見 變化自飛騰

図３　「春雲引志」

しかし、「月様」と「月馬」はある。宋・廖中『五行精紀』第十七巻「並論禄」に「又如二戊戌生一人一、二月乙卯、戊午日丁巳時、其戊禄在一巳、月馬同郷、此魏大夫命、刺二五羊群一」[21]があり、「月馬」は術数用語として使われる。また、「月様」は月のようなことを指して、普通に満月と三日月という二つの状況がある。満月の場合、うちわとか、顔とかを例えて、三日月なら、眉毛などを例える。

> 可憐団扇塵二侵損一、又見二生綃月様裁一。（陸游『剣南詩稿』巻二十九「四月一日作」）[22]
>
> 一彎月様黛眉低、四寸鞋児蓮歩小。（欧陽澈『飄然集』下「玉楼春・個人風韻天然俏」）[23]

月のような馬はどのような馬であろうか、月のような白くて美しい馬と思われる。ゆえに、「月様馬」は翻訳された新しい言葉であり、当時の読者に異文化の新しさをもたらした。そのような中国人になれない言葉を保存するのは外国文化の異質性を意識させた可能性がある。また、中国語と日本語の同形異義語も注目に値する。例をあげると、「月下雁帰」には「村雨」という言葉がある。

(21) 宋・廖中著.『五行精紀』、中国国家図書館蔵清・海虞瞿氏恬裕齋抄本第三冊第一九丁。
(22) 陸游著、銭仲聯校注.『剣南詩稿校注』、上海古籍出版社、2005、P2008。
(23) 宋・欧陽澈著.『欧陽修撰集』巻第六、中国国家図書館蔵永楽刻本第二冊第三三丁。

月下雁帰

雁かへる月の村雨はれはれてひかりもさすな夕ぐれのそら

黄昏天黒村雨過　月電交明独雁回

「村雨」は中国語には村で降る雨という意味であり、寒さ・寂しさ・静かなどの感じを含んでいる。杜甫「村雨」の「雨声伝二両夜一、寒事颯二高秋一」及び宋・鄭樵『夾漈遺稿』巻一「村雨」の「荒村常寂寂、小雨自涓涓。寒気侵レ人急、野花入レ目妍」(24)はこのような感じを詠んでいる。しかし、「村雨」は日本語で「にわか雨」のため、編者は字面だけ見てその本意を無視してしまう。同形異義語の誤用は「夜月感懐」にもある。

夜月感懐

きみがよはつきじとぞおふ[ママ]神風やみもすそかわのすまんかぎりは

君思三知二明月一　世事若二渾河一　神風常拂動　焉得三漾二清波一

「神風」はこの和歌で「神の威力によって起こるという激しい風」という意味に対して、中国語ではすさまじい軍隊の喩えであり、『文選』巻二十陸雲「大将軍宴会被命作詩」の「神風潜駭、有赫茲威」があり、李周翰は「神風は神兵なり」と注する。

同書における漢訳は仮名を誤読する状況が稀ではない。例えば、図1「鹿悲紅葉」の「釈音」部分を見れば分かるように、「わけ」は「悲しい」と解釈される。また、「革乃失氣苦叫」について、和歌の内容と「読法」によれば、もともとは「革乃失氣苦叫」のほうが適切であり、則ち「革乃失氣」(かなしき)の意味は「苦叫」(苦しく叫ぶ)である。しかし、「苦しく叫ぶ」は「かなしき」の意味をオーバーし、「叫ぶ」は加訳である。図3の「春雲引志」も仮名を誤読することがある。「釈音」の部分において、「揺騎」と「以尼變化」を例として説明する。「揺」(よ)は間投助詞であり、「騎」という意味ではない。「以尼」(いに)について、「い」は第四句の「くもい」の「い」に属し、「に」は格助詞であるため、「變化」ではない。このような状況はまだ少なくなく、助詞に対して恣意的な解釈をする傾向がある。

(24) 宋・鄭樵著.『叢書集成初編　夾漈遺稿』、中華書局、1985、P4。

そのほか、加訳現象もよくあり、前述の「革乃失氣苦叫」はその一例である。また、「春雲引志」にも加訳したところがあり、すなわち「釈音」の「密奴上見」である。「密奴」（みぬ）は上一段活用動詞「見る」の連用形「み」プラス完了の助動詞「ぬ」であり、「見た」という意を表すため、「上見」の「上」は加訳である。ある単語の加訳現象のほかに、和歌一首の容量と漢詩一首の容量が異なるため、漢訳において和歌の意味以上の内容を追加する。

松風撹睡

よもすがらおも[ママ]たりけり我心松ふく風におどろかされて

夜坐倦　猛思念　我心不二快活一　睡倒時　風吹松動　驚醒難レ安

この歌は「一晩じゅう君を思っていたことよ。物思いに沈んでいる私の心は松を吹く風に驚かれた」という意味であり、アンダーラインをつける部分は原文にない内容である。「夜もすがら」は一晩じゅうという意味であり、「坐して倦み」の意味を含めないが、人の状態を想像する。終夜にあの人のことを思っていて、「快活からず」。疲れたため、寝る。「睡りて倒る々時」に、松風に驚かれ、あの人来るのかと勘違いする。漢訳は原歌をもとに合理的な想像を加えて拡大されたものである。

訳漏れは少ないが、「新歳挙筆」はその一例である。

新歳挙筆

あらたまの年のはじめの筆立に万のたからをかきよするなり

簇々玉年　快々立レ筆　万宝写来　百事大吉

「あらたまの年のはじめの」の漢訳について検討する。「あらたまの年」を「簇々たる玉年」と訳されたが、意味が通じない。「簇々」は群がっていることであり、「玉年」は普通に少女のことを指す。『全唐詩』巻五百六十九李群玉「酔後贈二馮姫一」の「桂形浅拂二梁家黛一、瓜字初分二碧玉年一」が有名。「あらたまの」は枕詞として、普通訳されず、かえって意味を有する「はじめの」は訳されなかった。

本節は和歌の漢訳をめぐり、漢字の誤読、仮名の誤読及び加訳、訳漏れの面から考察していた。漢字の誤読は時々あるが、中国語にない言葉も作り、当時の読

者に異文化の新しさをもたらした。また、中国語と日本語の同型異義語を字面だけ見て使用する傾向もある。そのほか、中国人の編者は日本語文法に詳しくないため、基本的には和歌のほとんどが仮名を誤読する場合がある。最後に、和歌一首の容量と漢詩一首の容量が異なるため、編者は和歌の内容をもとに合理的な想像を加えて歌の容量を拡大した現象が多いが、訳漏れは少ない。

おわりに

本稿は『日本考』における和歌と歌謡の漢訳「切意」を中心に検討した。『日本考』の編者は、中国人に和歌という新しい文学様式を紹介する際、中国伝統的な文学様式である漢詩を利用するが、四言詩、五言詩、七言詩及び雑言詩など多様な形が併存している。編者は和歌の内容に基づいて各詩体を柔軟に利用する。39首の漢訳の中に、四言詩は計10首であり、五言詩は計12首であり、両詩体は全体の半分を超える。そして、『古今集』『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』などの勅撰集に由来した歌は四言詩と五言詩に集中し、文人作の雅さは四言詩と五言詩で人々に伝わる。その中に、訳文である五言詩は平仄及び押韻がともに絶句の格律と合致するのはないため、古体詩である。和歌の漢訳は、全体的に楽府詩の性格を有する。それに対して、歌謡を「山歌」に位置付けられ、その漢訳はわかりやすい。ある形式にこだわらず、口語を利用し、庶民的、俗的な傾向がある。

また、中国人の編者は日本語文法に詳しくないため、和歌を解読したとき、誤読は少なくない。漢字の誤読は時々あるが、中国語にない言葉も作り、当時の読者に異文化の新しさをもたらした。そのほか、中国語と日本語は同形異義語があり、そのまま使用すると、言葉の本当の意味を無視してしまう。最後に、和歌一首の容量と漢詩一首の容量が異なるため、編者は和歌の内容をもとに合理的な想像を加えて歌の容量を拡大した現象が多いが、訳漏れは少ない。

『日本考』における原典未知の歌謡はまだ6首が残り、研究の空白を埋める必要がある。また、渡辺三男の漢訳に対する書き下しは検討する余地があり、本稿は触れていないが、今後の課題として研究し続けていきたい。

参考文献

渡辺三男.『新修訳註日本考』、新典社、1985。
浜田敦.「日本風土記山歌註解」、『京都大学文学部研究紀要』(4)、1956-11。
吾郷寅之進.「中世難解歌謡私注(2)」、『甲南大学文学会論集』(12)、1960-9。
大友信一.「日本風土記“山歌”考」、『文芸研究』(40)、1962-8。
劉雨珍.「中国における和歌」、『日中文化交流史叢書6　文学巻』収録、大修館書店、1995。